『わだつみのこえ』日本戦没学生記念会 135: 4-24 2011.11

戦地に潰えた「東亜協同体」――日本兵の感情構造

一 主題と方法

一-一 理念と現実

この（東亞）新秩序ノ建設ハ日満支三國相携ヘ、政治、經済、文化等各般ニ亘リ互助連環ノ關係ヲ樹立スルヲ以テ根翰トシ、東亞ニ於ケル國際正義ノ確立、共同防共ノ達成、新文化ノ創造、經済結合ノ実現ヲ期スルニアリ。是レ實ニ東亞ヲ安定シ、世界ノ進運ニ寄与スル所以ナリ（傍点と丸括弧は引用者、以下同じ）

これは、一九三八年に出された政府声明「東亞新秩序」の一節である（歴史学研究会編、一九九七、八三）。太平洋戦争の導火線となった日中戦争の目的は、「国際正義」（反欧米帝国主義）と「アジア主義」（「日満支」連帯）を基に、「東亜新秩序」を創造することとされた（庄司二〇〇五、四七-四八）。「第一に、日本は敵対する世界から自身を守る『被害者』であると考える傾向がある。第二に、支配する民族を日本人と『別の者』と考えずに同じ共同体の構成員と考える傾向がある」（Duus, 1998:15）。戦争の目的は、「東亜協同体」①を建設することとされた。これが、日本兵（以下兵士）を説得的に日中戦争に駆る生-権力となった②。しかし日本軍は、中国大陸で戦闘と占領、武力と宣撫の支配を行った。理念は現実と乖離した。共存共栄の理念は、まず、中国支配の野望を隠蔽した理念により覆された③。次に、捕虜や住民④への略奪・強姦・拷問・処刑（以下蛮行）を禁ずるハーグ条約（「陸戰ノ法規慣例ニ關スル條約」、一九一一年批准）（外務省外交史料館編一九九二、八二四）を実質無視した軍により覆された。さらに、中国に出征し、戦場で戦った兵士により覆された。兵士は、戦地（戦場とその後方地を含む）で「東亜協同体」の建設を実践し、自らその理念を葬った。その結果が、戦場各地の人々の厖大な数の犠牲であった⑤。この事実に、殺され、焼かれ、奪われた⑥中国人の慟哭を聞くだけではない。日本人の罪業をみるだけではない。近代日本が作った優越の日本人像、侮蔑の中国人像の、戦争という異常時に現れた醜悪な相貌をみる。それは〈私〉の歴史認識を刺す棘である。その痛みが、筆者を本稿の執筆へ駆った。

一-二 主題と研究

本稿は、日本兵が（以下兵士）戦地中国で書いた手記・遺書・日記・手紙・葉書等（以下手記）をテクストに、彼らが中国人（将兵と住民、以下同じ）に抱いた感情（と態度）を分析する。戦地で兵士は、中国人にどんな感情を抱いたのか。そこには多様な感情があった。ゆえにその全体は、個々の感情相互が織りなす構造をなす。本稿の主題は、その〈感情構造〉を分析することにある。感情は個人の

情動である。同時に人間は、感情を時代や社会の言葉で説明する。その時、感情は（社会的、以下同じ）価値（イデオロギーを含める、以下同じ）を起動する。感情はいわば価値の器である。このように本稿は、感情の価値起動力に着目する。しかも兵士は、手記を書く形で、感情を対象化し、それを当時の言葉で説明した。ゆえに我々は、手記に、戦地にある人間の感情一般だけではなく、兵士の価値、つまり、自らの境遇の解釈の表出をみる。

戦地にどんな兵士がいたのか。彼らが、手紙で肉親に追慕の言葉を綴り、その次の文で中国人を嘲笑する。優しい父親と不遜の兵士。この行間に何があったのか。手記を書く兵士はみな、占領者であり支配者であった。その上で、彼らが中国人に抱く感情は、多様であった。中国人に好意を抱く兵士もいた。中国人を憐れむ兵士もいた。恐怖する兵士もいた。憎悪する兵士もいた。兵士たちはどこで分かれたのか。本稿は、この問いに迫ることにある。本稿の関心は、兵士が戦地で中国人に何をしたかにはない。兵士の加害については、記録の蓄積がある。本稿の関心は、右記の問いにある。中国人の苦難は、兵士の感情に発した。それが、兵士の中国人に対する態度を作り、態度が行為を導いた。中国人の苦難の解明は、兵士が中国人に抱いた感情構造の解明に始まる。

日本人のアジア観を論じた研究はある。例えば（小熊一九九八）（子安二〇〇三）。しかしそこから、兵士の中国人認識を直に演繹することはできない。日本兵の中国人認識に言及した研究もある。例えば（安藤一九七一）（竹内二〇〇六）。しかしそこに、兵士が中国人に抱いた感情構造をみることはできない。また、戦時の敵イメージや戦闘心理について論じた研究もある。サム・キーン Sam Keen は、戦時メディアが作る「敵の顔」の心理的機能について論じた（Keen,1986=94）。デーヴ・グロスマン Dave Grossman は、戦闘場面における兵士の心理について論じた（Grossman,1995=98）。ミシェル・ヴィヴィオルカ Michel Wieviorika は、人間〈主体〉の否定が暴力（殺人）に至る過程について論じた（Wieviorika,2004=07）。これらの研究から、兵士の自己＝他者認識の諸相や残酷な人間の生成過程を知ることができる。戦地では、兵士は特異な精神状態に陥る。敵が恐怖の悪魔となり、自己防御＝殺人への倫理的抵抗が限りなく低減する。兵士は、「身辺に立ちこめた血の匂いの意識が、常軌からわが身を逸脱させずにはいられないそのような衝動」（鹿野二〇〇五、一八四）に駆られる。人間が変わる。「戦地などでは常に人間業ばなれのしたことが平凡な兵士の中で行われて居るのに驚くのです」（岩手県農村文化懇談会一九六一、七四）。そして人間の感情を失っていく。「敵の死体もぼつ／＼道ばたにころんでいる。弾でうたれたり又剣で突かれたり切られたり無残なる死方をしてゐる。……夜も死人をまくらにしたりして来た。何んとも感じない」（岩手・和我のペン一九八四、七三）。

本稿は、この「人間が変わる」過程を、感情構造の変容過程として分析する。以て、兵士に宿る「人間の獣性」（日本戦没学生記念会一九九五、二八四）の実相に迫る。兵士が中国人に抱く感情は、日本人の中国観一般にも、戦闘心理一般にも回収されない。それは、戦争・民族・心理の領野が交錯する箇所にある。ゆえに、兵士の感情構造を分析するには、そのための枠組を構成しなければならない。本稿は、兵士の手記や先行研究を参照し、兵士の感情構造の分析枠組を構成する。そして、兵士の手記を材料に枠組の解釈を試みる。感情はつねに行為と直結するものではない。敵に憎悪を抱く者が、つねに敵に残酷であるとは限らない。敵（側の民衆）に好意を抱く者が、つねに敵に寛容であるとは限ら

ない。感情と行為の間には種々の条件が介在する。

本稿はまず、用いる資料について論じる。次に、兵士の感情構造を規定する諸条件（日中戦争の特徴、兵士の属性、軍の態度）について論じる（二節）。次に、感情の類型化枠組を構成し、類型及び類型間の関係を解釈する（三節）。最後に、感情構造の分析の、戦争社会学（戦争に関わる人間的事象の社会学的研究）にとっての意味について論じる（四節）。

一- 三　資料の問題

本稿は、兵士の感情構造を分析する材料として、彼らが戦地で書いた手記を用いる。戦後の元兵士の証言を収めた文献は多い。しかしそれらは、戦後の価値観を受容するにせよ拒絶するにせよ、そのフィルターを通して、戦地の記憶を再現したものである。本稿は、「戦地で書かれた」という時制に固執する。とはいえ、戦地で書かれた手記も公刊されたのは戦後である。ゆえに、「事実」の偏差の大小は、相対的なものである。「事実」の偏差を最小限に抑えるだけである。本稿が参照するのは、次のものである（東大戦没學生手記編集委員會一九四七）（岩手県農村文化懇談会一九六一）（菊池一九八三）（岩手・和我のペン一九八四）（吉田一九八七）（わだつみ会一九九三）（真継一九九四）（日本戦没学生記念会一九九五）（辺見一九九五）（小野他一九九六）（山本二〇〇一）（辺見二〇〇二）（日本戦没学生記念会二〇〇三）（辺見二〇〇三）（武田二〇〇九）。これらは、筆者が読みえた手記である。本稿は、これらの手記から抽出される兵士の感情構造を分析する。読みえた手記は、手記本の（ごく）一部である。そこには、資料の量的な制約、つまり、資料の代表性の問題がある。本稿は、ひとつの感情構造の分析にすぎない。

戦地で書かれた手記は、編集されて公刊された。ここに、手記の解読をめぐる問題が生じる。手記本には編集方針がある。ゆえに筆者は、編集方針を距離化して読むことになる。手記の中身が改竄されている場合、原本に当たれない筆者には、なす術がない⑦。筆者は、手記解読の手順に則り、文脈を大切にテクストを解釈し、行間の意味を読み取り、一歩ずつ兵士の感情構造に迫るしかない。

手記には、それ自体に胎まれる問題がある。まず手記は、書き手の関心を基に書かれた。その関心は、手記が書かれた状況ごとに異なる。手記の書き方も異なる。手紙（や葉書）では、宛先により書き方が異なる。例えば親への手紙には、心配をかけまいとする紋切り型の文が多い。つまり手記は、書き手が選択した「事実」群の解釈から成る主観的現実を表す。次に手紙は、軍の検閲を受けた（士官以上で検閲を免れる場合もあった）。ここにも中身の作為がある。読者は、手記に綴られた字面の裏、行間に隠された意味を探るしかない。それは容易なことではない。しかし、手記の資料価値は十分にある。作為や「隠された意味」は、しばしば重要な意味をもつ。兵士の勘違いや嘘も立派なデータである。本稿の関心は、何が事実だったかではなく、兵士が何を「事実」と思ったかにある。その主観的な状況定義 definition of situation が、彼らの感情を形成し、価値を起動した。

これらはすべて、感情構造への接近、その「客観的な」把握の阻害要因となる。ゆえに、手記本の資料批判が不可欠となる。筆者は、資料の位置を定め、解読の手順を遵守する。森岡清美は、兵士の手記

を解読する方法として「重ね焼き法」を採った。それは、「資料全体を一つのプールとして扱い、そこに認められている共通特徴を取り上げて論じる」（森岡一九九五、二二）方法である。兵士の戦地体験は無限に多様である。にもかかわらず、兵士は戦地で侵攻者として中国人と遭遇し、占領者として中国人に接した。その基本事実は、（その限りでの）手記の同質性をもたらしている。それが、「重ね焼き法」を可能としている。また、手記が記す多様な体験の中に、それらを貫き、型どる感情構造がある。このような前提に立ってこそ、感情構造の分析が可能となる。

二　感情構造の条件

戦地の兵士の感情構造は、種々の外的条件に規定された。その主たる条件は、一つ、日中戦争の特徴、二つ、兵士の属性（世代、学歴、仕事）、三つ、軍隊の態度である。感情構造の分析に入る前に、これらの条件を示しておく。

二-一　日中戦争の特徴

日中戦争は、一九三七年の蘆溝橋事件に始まり四五年の日本の降伏で終った、日本と中国の全面戦争をいう（十五年戦争では一九三一年の満州事変を起点とする。一九四一年以降はアジア太平洋戦争の一部となる）（相賀一九八七、七八七-七九一）。中国戦線には平常時で五〇万人、最大時で一〇〇万人を超える兵士が派遣された（山田一九九七 a、一六七）。中国の正規軍と民兵（「匪賊」「土匪」と蔑称された）の抵抗は強く、日本軍は、点（都市）と線（鉄道）を確保するに留まった。戦争は長期化し、兵士の士気は弛緩し、軍規は乱れた。こうして、戦争による「日本軍の死者は四十万人、戦傷病者は九〇万人」（下中一九九三 b、五四〇）、「（中国）軍人・民兵の死者三二一万人、一般住民の死者一〇〇〇万人以上」（歴史学研究会編、一九九七、八三）に上った。このような日中戦争は、兵士の手記分析にとって、次のような特徴をもつ。一つ、戦争が長期に及んだ。二つ、戦地で厖大な数の兵士と中国人が遭遇した。三つ、戦地が広大な中国大陸であった。ゆえに、四つ、兵士と中国人の遭遇場面が多様であった。そのため五つ、兵士の戦地体験が多様であった⑧。これらの特徴から、六つ、戦地で多くの手記が書かれた。また、手記を書く主体の条件として、七つ、兵士には「普通の人」が多かった。「中国戦線に派遣された兵士の大部分は予備役・後備役で、兵士としては比較的高年齢の人たちで、少々世間擦れしており、硬直した職業軍人から見れば士気も低く、軍規厳正ならざる人たちであったが、その多くが社会人として守るべき家庭生活をもっている人たちであった」（山田二〇〇六、五六）⑨。これらが、本稿が兵士の感情構造の分析に、中国人を選んだ理由である。

二-二　兵士の属性

兵士の感情は、中国人認識を起動した。中国人認識は、兵士が生きた時代や受けた教育により育まれた。安川寿之輔は、学徒兵を「前わだつみ世代」（一九〇八-一九年生れ）、「わだつみ世代」（一九二〇-二五年生れ）、「少国民世代」（一九二六-三六年生れ）に分け、世代が下るにつれて軍国主義教育が徹底し、学徒のアジア民族に対する「加害者意識が稀薄化した」（安川一九九七、八八）とした。軍国主義教育は、兵士の中国侵攻を懐疑する芽を啄んだ。また一般に、高学歴の学徒兵

は戦争により懐疑的で、低学歴の少年兵や庶民兵はより同調的であった。「学徒兵たちが、その戦争に疑いをもち、批判を抱きながら死出の旅路に出たのにくらべ、せめて救われるような感じ、と同時に、逆に戦争の持つ意味を知らずに、知り得る機会を与えられずに、その故に自ら進んで死地に赴いたであろうその健気さ、あわれならざる戦死などあろう筈がないにしても、このような、わが身のあわれさをあわれさとも知り得ずに死んでいったあわれさ、こんなみじめな死に方がどこにあろう」（岩手県農村文化懇談会一九六一、二三六）。しかし同時に、世代や学歴は、兵士の感情構造の決定的な規定因ではなかった。少年兵にも中国侵略に懐疑する者（小野一九六九、二二四）や、捕虜や住民への蛮行に疑念を抱く者（猪熊二〇〇八、四二）がいた。逆に学徒兵にも、聖戦の大義を信じ、戦闘の勝利に酔う者がいた⑩。

兵士の多くは農民出身であった。日中戦争の兵士の手記には、中国農民についての記述が多い。「照り続く為水牛により田に揚水して居るあり、クリークの泥を運んで田の肥料となす等、耕地は戦争も嵐程も跡無く復旧して土に生きる者の力強さを示して居りました」（岩手・和我のペン一九八四、九五）。わが家族への追慕と重ねて、中国農民への共感が吐露された。しかし同時に、その兵士（の多く）が中国農民への蛮行を行った。一九六〇年代、農民兵の遺稿集（岩手県農村文化懇談会一九六一）の公刊を機に、農民兵と学徒兵の戦争認識の異同を論じる「農民兵士論争」が起きた。その結論の一つは、農民兵の戦争認識に一定の傾向はあるにせよ、その過度の一般化は危険というものであった。農民兵の戦争認識は、「個別に村と家の中での地位や教育歴や軍隊内の立場や状況（そして軍隊内での立場に結びつく、独自の能力や技能）」（傍点は原著者）（赤澤二〇〇〇、六四六）により一様ではなかった。同じことは、学徒兵についてもいえる（高田二〇〇八）。しかも中国人という他者を前にする時、学徒兵と農民兵の感情構造の差異は限りなく小さくなる。

二-三　軍の態度

軍（隊）は、戦地の兵士の感情構造を直接に規定した。軍は占領地の治安を図るため、住民への宣撫工作を行った。宣撫は武力と一体であった。「『土匪』にたいする討伐と『領民』にたいする宣撫とは、手法としては対極的ながら軍事的心理的制圧としての同根性をもっていた」（鹿野二〇〇五、一九八）。軍は捕虜や住民への蛮行を黙認した。「『便衣兵』すなわち『私服兵』『ゲリラ兵』と認定するには、たとえ略式裁判であっても、武器弾薬を携帯した戦闘行為者であることを確認する必要があったが、日本軍はそのような手続きを取らずに、『捕虜ハセヌ方針』で臨み、『逮捕監禁』した後に集団的に殺害したのである」（笠原二〇〇七、一二九）。「支那人ハ戸籍法完全ナラザルノミナラズ特ニ兵員ハ浮浪者多ク……之レヲ殺害又ハ他ノ地方ニ放ツモ世間的ニ問題トナルコト無シ」（陸軍歩兵学校「対支那軍戰闘法ノ研究」）（野田二〇〇七、二七一）。上官の命令で捕虜を殺害した者もいる。「たまでうち殺したのは多山ありますがさし殺したのは一名です。それはほりょにしたのを小隊長の命令により自分がさし殺しました。本当にそればかしは忘れる事が出来ません」（辺見一九九五、一八）。

少なくとも軍は、兵士による捕虜や住民への蛮行に無頓着であった。「一九三一年から一九四二年までの臨参命・臨命・大陸命・大陸指の命令文と付属文書を悉皆的に全文検索して見た結果、命令の発令側には占領地の『民』というものがほとんど配慮されるファクターではなかったことが改めて確認できた。

中央部がこれほどまでに『民』について無配慮・無関心であれば、出先の部隊や将兵が占領地の『民』に対してどれほど無頓着で、暴力的であったとしてもそれを抑制するベクトルなどそもそも働き得ないものであろう」（山田二〇〇七、二六四）。ゆえに、兵士の蛮行には歯止めがなかった。その結果、逆に軍は兵士の「行き過ぎ」を諌めるはめになる。『戦陣訓』⑪は、「万一ニモ理由ナク彼等（支那民衆）ヲ苦メ虐ゲル様ナコトガアツテハイケナイ、武器ヲ捨テテ投降シタ捕虜ニ対シテモ同様デアル、特ニ婦女ヲ姦シ私財ヲ掠メ或ハ民家ヲ謂モナシニ焚クガ如キコトハ絶対ニ避ケネバナラヌ」（下中一九九三ａ、三〇二）と謳い、その徹底が図られた（内海二〇〇五、一三三-一三六）。しかし、軍規の引き締めは効を奏さなかった。「軍司令官令により、略奪、放火をはじめ、首都入城についての諸注意事項が厳達されたにもかかわらず、あちこちに火災があり、軍紀厳正は掛け声ばかりの感じである」（山本二〇〇一、一〇〇）。このような軍の体質は、兵士を捕虜や住民への蛮行に駆るに十分であった⑫。

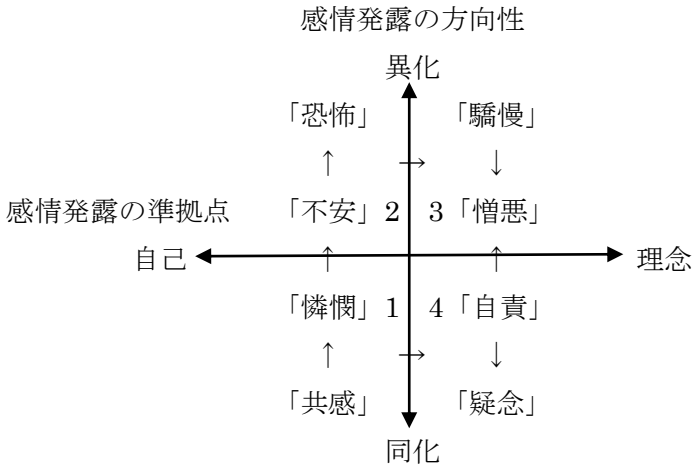
兵士の感情構造は、軍隊の中でも醸成された。軍隊では、位階による暴力的な兵士管理が行われた。兵士（とくに初年兵）は、上官の罵倒と暴力を「天皇の命令」として耐えるしかなかった。その中で兵士は、人間の感性を磨耗させ、人間の認識を荒廃させていった。「日本軍は初年兵への抑圧が徹底していた。……（軍隊内の）隠蔽された矛盾と暴力の恐怖は、侵略地での弱者への暴力に転化された」（野田二〇〇七、二七五）。兵士は、鬱屈した感情の捌け口を中国人に対する蛮行に求めた。

三　感情の類型

三-一　兵士の類型

戦地では、抽象的な〈敵〉が個別の顔で現れる。兵士の中国人認識は具体的である。ゆえに、兵士の中国人に対する感情は多様である。彼らは、どんな時にどんな思いで中国人への蛮行を行ったのか。どんな思いで行わなかったのか。ここで、兵士の感情構造の分析枠組を提示する。多様な戦地体験の多様な記述の全体を一望するには、個々の記述から鍵となる言葉を抽出し、それを組み合わせて類型を構成する方法しかない。類型は、研究者の観念的な構築物であり、兵士が現実に抱いた感情ではない。それは、多様な感情を識別し、解釈するための用具である。ゆえに、類型の構成は幾様にも可能である。左図はそのひとつである。図は二つの軸で構成される。横軸に「感情発露の準拠点」を取る。つまり、戦地の兵士は、どこに基点に目前の中国人を感得したかである。軸の両極を「自己」（自分の情動に沿って中国人を感得する）と「理念」（「聖戦の大義」や「人間主義」に沿って中国人を感得する）とする。縦軸に「感情発露の方向性」を取る。つまり、兵士は中国人をどんな方向で感得したかである。軸の両極を「異化」（中国人を日本人とは「異なる」、つまり敵または敵に繋がる人間として感得する）と「同化」（中国人を日本人と「同じ」、つまり東亜の隣人として感得する）とする。こうして、構成された四つの感情類型および類型間の関係は、以下のように解釈される。それは、ひとつの兵士の感情構造の抽象的で範型的な描写である。

図．日本兵が中国人に抱いた感情類型



まず兵士は、戦場の光景を見て驚く。「昨日は土民が十一名、師団の証明書を持っていたが、日本軍の電線を切断したので皆銃殺した、シナ兵は正規兵、土民兵皆死だ。畑の中、クリークの中、家屋の付近、塹壕の内外その多数なるに驚くのみだ。これを見ては敵兵ながらも食事が進まない」（吉田一九八七、六五-六六）。兵士の蛮行に驚く。「部落掃蕩に行きて殺人犯人を見いだし三人捕縛されたが、日本人死体一名が不明のため同人らを連行、種々拷問して捜索に努めた。我らの二中隊の一小隊はこの援護に行き、拷問を見て、後では目をそむけたいくらいであった」（日本戦没学生記念会二〇〇三、九〇）。戦地の民衆の様子に驚く。「此辺一帯は支那軍に荒されず土民も沢山見ゆ、子供を抱いたる母、手を合せる老人、恐怖心に泣く小児等を見るとき敵とは言へ可憐なるものあり、二ツの子供を抱きたる母親の、銃にて負傷したる等、戦場に非らざれば見る能はざる光景だ」（小野他一九九六、三一九）。では兵士は、これらの光景にどんな感慨を抱いたのか。

（一）兵士は戦場の光景に驚き、次に「憐憫」の情を抱く。「突然一人が目の前の井戸の中に飛び込んでしまったので、真上から撃ち込み水中で苦しむのを殺した。他の二人は号令で発射されると同時に一言も発せず、グニャリと崩れて即死をとげた。横に寝かして竹蒲團を賭けて置いて来たが、いよいよ死んでみるとかわいそうにもあった」（日本戦没学生記念会二〇〇三、九〇）。「敗戦国」の民衆の苦難を憐れむ。「シナ人家は全部焼払われて再び帰られない様にしている。もはやこの揚行鎮あたりにはシナ兵は一人もいないが、婦人が三人子供が二十人いる。兵士の残飯を貰いに来る子供は如何にも悲惨で可哀想である。兵士は残飯どころか自分の飯盒の飯まで与えた上に、金銭まで与えてやっている」（吉田一九八七、五二）。残酷な殺戮を描写した後に、「敗戦国の兵や民は憐れだ」と記す。

憐憫の情の奥には、郷里の家族と重ねて中国人を思う「共感」がある。「（焼け落ちた家を）女の子供がボンヤリ立つて見て居る様がみじめなので菓子をポケットから出してやる、僅かな菓子ではあるが嬉々として貰ふ様は哀れでもあり可愛相だ、いじらしい姿を見る、子供等の事を想ひ出し目頭が熱くなる」（小野他一九九六、三四）。他方で、悲惨な光景を見てしまった〈私〉への悔恨がある。「中沢隊の一兵が一支那人を岩石で殴打し、頭蓋骨が割れて鮮血にまみれ地上に倒れた。それを足蹴にし、また石

を投げつける。見るに忍びない。それを中澤隊の将校も冷然と見ている。高木少尉の指図らしい。冷血漢。罪なき民の身の上を思い、あの時何故遅れ馳せでも良い、俺はあの農夫を助けなかったか。自責の念が起る」（日本戦没学生記念会一九九五、九〇）。

（二）憐憫の情は、「不安」を喚起する。捕虜や住民への蛮行は、いつか彼ら彼女らの復讐を招く。そのような不安が兵士を襲う。そもそも他者への暴力は、他者への不安の表出である。「壁には抗日ポスターが、ガリ版で書かれて貼りつけてあった。その中には『日軍実小的消耗代価』として一民焦土比（於等）、その次に日本軍の骸骨の山と積まれた絵が書いてあった。二枚ばかりはぎ取って図嚢の中に収めておく」（日本戦没学生記念会二〇〇三、一二二）。不安は容易に「恐怖」へ高まる。「生れてはじめて人をなぐったり、銃を以ってついたりしました。一人して番してるのは気が気でなくて歩きました。夜は銃声の音する。敵は愈々くるよしでありますから、愈々戦地に来た心地がします」（岩手県農村文化懇談会一九六一、八二）。このような不安や恐怖は、家族の将来に投射される。戦争に敗ければ、家族が酷い目に会う。「何時かは何時の日にかは、漢民族の復讐にわれわれの子孫は泣くようなことになるであろう。われもし支那の青年なりせば。しかも、しかも、われは現実にはにくむべき日本軍部の中の最細の構成分子となっている一兵士なのだ」（日本戦没学生記念会一九九五、一二八）。不安は手紙にも滲み出る。「お手紙ありがたう。丈夫で勉強してゐるさうだがます／＼勉強するんだよ。支那の子供はお父さんもお母さんも兵隊へつれて行かれてお祖父さん、お祖母さんたちとゐるよ。食ひ物もなくて困ってゐるよ。なまけたり勉強しなかったりすると戦にまけて支那の子供の様にひどい目にあふよ」（岩手・和我のペン一九八四、八八）。こうして、だから戦争には敗けられないとなる。「戦争に勝つて初めて学士も博士もあるのであり、負けたら皆が奴隷にされることは受け合ひです。小生にしても明日の命も知らぬこの危険な戦場に居るのですが、たとへ小生が戦死しても日本が勝てば銃後の家族は安泰ですが、負ければ小生だけが無事であつても家族の生活は存在しません」（辺見二〇〇二、九二）。

（三）兵士は、敵（中国人）への不安や恐怖を逃れようとする。そこに敵との戦いを正当化するイデオロギーが介在する時⑬、不安や恐怖は「憎悪」に転化する。「事態の正当化には『皇軍』『日本』を掲げるほかなく、そのことがいっそうそれらの価値に縋りつく意識を強めてゆきもしたであろう」（鹿野二〇〇五、一八五）。戦争は聖戦だという大義を得る時、抗戦する（刃向う）敵は憎しみの対象となる。そして兵士は、「良心の呵責」を放擲する。「山となつて居ル死人ノ上をアガツテ突刺ス気持ハ鬼ヲモヒシガン勇気ガ出テカ一ぱいに突刺シタリ、ウーン／＼トウメク支那兵ノ声、年寄モ居レバ子供モ居ル、一人残ラズ殺ス、刀ヲ借リテ首ヲモ切ツテ見タ」（小野他一九九六、三五〇-三五一）。敵が戦友を殺すと兵士は嘆き、復讐心に燃える。戦友の死は贖われなければならない。「小隊長殿は屍となって現はれたさうだ。工兵の小隊長殿も共に、支那の惨虐な振舞に全くいきどほらずに居られない。小隊の兵は各々線香を上げに来て涙を流して行く、どんなに情けなく悲しい事か、一日も早く此の仇を討ちたい」（小野他一九九六、一七二-一七三）。こうして兵士は、敵の殺害に躊躇しなくなる。「第一小隊ニテ捕リヨ六匹殺ス、

第三小隊モ五匹捕ヘル」（小野他一九九六、二〇八）。最後は、遊び感覚で敵を殺す。「今日は房山県□三里南西に討伐に行って来た。土産物は匪賊や敗残兵をたたいて来た。晩か明日の朝までの料理です、兵隊は喜びて腕だめしやるのです」（岩手・和我のペン一九八四、九七）。 また、憎悪は被害妄想を招く。「日本兵側には、兵自身の直接的な体験ではなく、伝聞による間接的な『体験』にもとづく敵愾心が形成されていたことである。この敵愾心が、被害にあった日本人に代わって中国人に対する無差別な虐殺を遂行させる要因となっていたのである」（伊香二〇〇七、一四九）。そして逆上する。「全体的思考ができず、自分に都合よく単純化された正義や邪悪の分別に生きる者は、他者の怒りに反応しやすい。自らが侵略軍でありながら、少し攻撃されたからといって逆上し、集落を皆殺しにする話は、日本将兵の聞き取りに散見する」（野田二〇〇七、二七四）。

敵（中国人）への憎悪の奥には、敵への「驕慢」がある。「昨夜も電線を切断されて迷惑しましたが、土民をいちいちいじめてもいられないから、愛撫して幾等でも仕事に従事する様にと思って居りますとそれに付け込んで土民のふりして悪戯して歩かれますのでほんとにこまります」（岩手県農村文化懇談会一九六一、七一）。驕慢は他者への侮蔑である。「兵隊は呑気だ、支那人は水の中でも畑でも田でも昼寝している等云ひながら通り過ぎる」（小野他一九九六、一九〇）。侮蔑は自己への優越感である。「人間に変りは有りません。こちらで笑って接すれば、むこうでやさしく何でもくれます。こちらが抜刀なんかして行けば恐しがって逃げてしまいます。パンやなんかやったり残ったごはんをやったりしたら二里も三里も道案内してくれます」（岩手県農村文化懇談会一九六一、九九）。兵士は、中国人を「幼い子ども」のように「慈しんで」いる。

（四）中国人への憐憫は、他方で、兵士の蛮行への「自責」の念を生む。自責は戦争への「疑念」を生む。疑念は二つの方向に分岐する。一つ、「東亜新秩序」の理念を信じる兵士は、中国人への蛮行が容認できない。「暴支庸懲、東亜新秩序建設、東洋平和の目的達成のためと言うが、罪もなき両国の兵士たち、何の怨恨もない兵たちの殺し合い、なんともわけがわからない。……大地を見ても、水も、稲も、雑草も、ほとんどすべてが日本も中国も同一であり、同じ太陽が照り輝き、夜は暗く、月は淡く光り、星はまたたく。森羅万象変わることがない」（山本二〇〇一、九八）。蛮行を行う兵士に憤慨する。「行く町々で目ぼしい金品を強奪して来たり、姑娘を強姦したり、良民を殺害したり、皇軍軍人にあるまじき行動をして、それを得々と自慢しているのを見て、なんと情ない兵隊かと残念でしかたがない」（山本二〇〇一、一四九）。憤慨は上官批判となる。「しかもそれ（蛮行）が下士官であったり、指揮班の幹部であるのを知り、憤激する」（山本二〇〇一、一四九）。最後に軍隊批判となる。「中国兵を殺すことは、敵であっても捕虜は捕虜取扱いの国際法があり、不可であることは、教育を受けた兵ならばみんな承知していることである」（山本二〇〇一、九七）。そして自らの行動を自制する。「夜戦友等性の衝動止み難く狂淫に乱舞する、自分の其の巻に誘そわれんとしたが心の駒の手綱を引絞め危うき瀬から脱れた」（小野他一九九六、五一）⑭。

二つ、前掲ハーグ条約は、捕虜の人道的待遇、住民の保護を謳っている（松井・薬師寺二〇〇五、七五〇-七五三）。そのことは軍紀に盛られ、兵士も知っていた。規範と現実の乖離に、兵士の罪責感は深まる。さらに、兵士の蛮行への疑念は、普遍的な人間主義を喚起する。「憎まないでも良いものを憎みたくない」（東大戦没學生手記編集委員會一九四七、一六）⑮。「女房であろう、血にまみれた男にとりついて泣いていた。しかし死ななかった。軍隊が去ると立ち上がって、女房に支えられながらトボトボ歩き去った。俺の子供はもう軍人にはしない、軍人にだけは…平和だ、平和の世界が一番だ」（日本戦没学生記念会一九九五、九〇）。そして兵士は、自らが兵士であることに悄然とする。兵士は、人間主義の理念と現実、自己存在の乖離に悶々とする。

三-二　類型の説明

戦地の兵士の感情は、「憐憫」「不安」「憎悪」「自責」を鍵用語に類型化された。「憐憫」の奥には「共感」があった。「憐憫」は一方で「不安」を喚起した。「不安」は容易に「恐怖」に高まった。また、「不安」は「憎悪」へ転化した。「憎悪」の奥には「驕慢」があった。他方、「憐憫」は「自責」の念を喚起した。「自責」は戦争への「疑念」を生んだ。また「自責」は「憎悪」の批判を喚起した。このような感情構造の解釈から、次のことが指摘される。兵士の感情構造は、「憐憫」を基点とした。蛮行を行った兵士の感情の基点も、「憐憫」であった。「憐憫」は「不安」や「憎悪」を喚起した。それらが「憐憫」に戻ることはなかった。これらはひとつの解釈である。これ以外の感情の回路を否定するものではない。四類型の解釈には、さらに三つの留意すべき事柄がある。

一つ、戦地の兵士は、中国人に対して多様な感情を抱いた。しかしそこには、共通の縛りがあった。それは、兵士はみな戦争に参加し、侵攻者・占領者として戦地にあったという事実である。それは、兵士の蛮行に疑念を抱いた兵士も例外でない。彼らは蛮行を傍観した。存在と感情の乖離は容易に埋まらない。ゆえに、彼らの手記には矛盾が胎まれる。「兵隊ひととおりのことはしてみたが、一皮むけばまだ応召前の小生とすこしも変わらない。いつになったら“逞しき“兵隊”になれることやら、お恥かしきしだい。ただ”大陸ボケ”がしてボンヤリしてきただけ」（日本戦没学生記念会二〇〇三、一三六）。この兵士は、（応召前の）自己意識と戦地での（受容すべき）体験の乖離に（まだ）悩んでいる。

二つ、「憐憫」「不安」「憎悪」「自責」は、兵士が中国人に抱いた中心的感情である。実際、兵士はみなそれらの感情を併せ持った。兵士の心情は、たがいに相対的な差異でしかない。その上で、どれかの感情を強く抱き続けた兵士はいる。中でも「憐憫」の言葉を添えた手記は多い。「時々□方に十、彼方に二十といふ様に馬賊が出没する。だけど我々はそんなものに目も呉れぬ。唯二三発□の偉大な機関銃で射撃すれば忽ち死の巷と化す。死んでも誰れもかまって呉れぬ。敵と言へ共哀れなものさ」（岩手・和我のペン一九八四、六）。

三つ、兵士は、戦地にあって後方から前線への移動に従い、感情構造を変容させていった。「上海、杭州湾から戦闘と殺戮を繰り返してきた日本の将兵は、仲間の犠牲が増えるに比例して中国人に対する復讐心、敵愾心を強めていったことと相俟って、残虐行為に慣れ」（笠原二〇〇七、一一七）ていっ

た。伊藤桂一は、次のような事例を紹介している（伊藤一九六九、二六六-二六七）。輜重隊の伍長が少年敗残兵を連隊本部に連れて行く途中、数名の歩兵に呼び止められた。「その俘虜（えいこう）公（捕虜のこと）を俺にくれ。」「何にするのか。」「戦友の仇にやっつけるのだ。」伍長が断り進みかけると、歩兵は少年兵を奪い取り、刺殺してしまった。伍長が「君達はそれでも日本兵か。こんな赤ん坊みたいな者を殺して気持がいいのか」と抗議すると、相手は「第一線を知らぬ輜重隊が何をいうか。毎日毎日戦友が殺されてみろ。口惜しくなるのが当然だ。その仇を討つのがなぜ悪い」と口々にいう。伍長は「無抵抗で降参した物を大勢で殺すのは卑怯だ。奴を殺しても君達の戦友は帰って来ないだろう」という。すると相手の一人が「お前は俺達戦友よりチャン（支那兵）の方が正しいというのか」とつめよる。伍長は「俺はただ君達歩兵は日本の武士道というものを重んじているだろうと思ったからなんだ」と言ってその場をすませる。ここに、前線で戦い人間性が涸渇した歩兵と、後方にあって（まだ）人間性を保持する輜重兵の対比が鮮やかである。

四　研究の射程

以上、兵士の感情構造のひとつの解釈を提示した。感情構造の分析は、さらに二つの研究課題を提起する。一つ、兵士が中国人以外の他者に抱いた感情構造の分析である。日本のアジア支配のもと、ある人々（朝鮮人、台湾人等）は、植民地人とされた。ある人々は（フィリピン人、インドネシア人等）は、占領され、軍事支配を受けた。兵士の彼ら彼女らに対する感情構造は、すべて異なる（植民地や占領地に移住した民間人の感情構造も異なる）。その差異は、兵士の他者認識の差異の投射でもある。まず、このひとつひとつの民族・国家の人々に対する感情構造の分析を重ねること。その後で、そこに共通する感情構造を抽出すること。こうして、兵士の「アジア人」に対する感情構造が浮かび上がる。

二つ、感情構造から価値と認識への下向である。感情の発露は価値を起動する。戦地の兵士の感情構造は、人間殺戮の状況に煽られたものである。とはいえそれは、人間の異常心理（だけ）に回収できるものではない。戦地の感情構造は、兵士の中国人認識の情動化された表出でもある。

男たちは、大日本帝国陸海軍の兵士になった。兵士になることが志願であろうと召集であろうと、彼らは戦争を受容し、戦争に参加した。しかし、受容の仕方は多様であった。筆者は前稿で、特攻隊員の死の意味について類型化を試みた（青木二〇〇八、七八-八二）。それは、（少なくとも部分的に）兵士の戦争の受容類型としても援用可能である。一つ、「忠義の共同体」に生き、天皇を仰ぎ、皇国の義に殉じる兵士がいた。二つ、「恩愛の共同体」に生き、家族への恩愛に殉じる兵士がいた。三つ、「友愛の共同体」に生き、戦友と死をともにする兵士がいた。四つ、「自由の理想郷」に生き、理想郷の到来を信じて、戦争の生贄になる兵士がいた。それらの類型は、兵士の中で重なり合っていた（その基点は「恩愛の共同体」であった。兵士は「おかあさん」と言って死んだ）。しかしそれら四つは、兵士の戦争に対する中心的態度としてもあった（「天皇陛下万歳」と叫んで死んだ兵士もいた）。

このような兵士の戦争受容の類型は、戦争で「守る」もの、正確には「守るものを失なうことの恐怖」の類型である。またそれは、他者（敵）に媒介された自己認識である。「忠義の共同体」に生きる兵士は、「東亜協同体」の義を信じる兵士である。彼らにとって中国人は隣人（指導されるべき「弟」）である。

「恩愛の共同体」に生きる兵士は、敵から「家族を守る」ために戦う兵士である。彼らにとって中国人は恐怖の人々である。「友愛の共同体」に生きる兵士は、「戦友の仇を討つ」ために戦う兵士である。彼らにとって中国人は復讐の相手である。「自由の理想郷」に生きる兵士は、戦争を否定し、敵との戦いに躊躇する兵士である。彼らにとって中国人は人間同胞である。こうして、自己認識（戦争受容）は他者認識（中国人認識）となる。感情構造の基底にはこれがある。

五　結語

兵士の戦争受容は、直接には軍の教育の産物であった⑯。軍の教育は「民族や国家の原型」（佐藤二〇〇二、四五）であり、「国民の視野の凝縮体」（鹿野二〇〇五、一九八-一九九）であった。中国人認識は民族排外主義を内包した。それは近代日本の産物であった。「知性がよく日本帝国主義の野望を見抜いても、歴史を通して定着した潜在意識（中国人への優越感）を克服するのは容易ではない」（岡田二〇〇九、四二）。要するに、戦地の兵士の感情構造の底に、日本近代の民族排外主義があった。「『侵略戰争』を支持した者は、ひとり殘らず懺悔の上にたつ再出發が必要ではないだろうか。『口先だけで支持したのだ』という風な自己辨解が許されてはならない。『強いられ、目かくしされていたのだ』といふ逃避も許されない。自己の弱さや妥協性を、命を捨てた人々の前に謝罪すべきではないであろうか」（三井一九四七、 二三三-二三四）。直截で真摯な叫びである。今しがた戦地から戻った者のこの言葉は、今も〈私〉を問うている。ならば、戦地の兵士の感情構造を可視化し、〈私〉の目に曝すこと。そしてそこに宿る「人間の獣性」を暴くこと。それは、戦争社会学が行うべき重要な課題ではなかろうか。本稿はその小さな一歩である。

[注]

①「東亜協同体」論では、一九三〇年代末、、東アジア（日本、満洲、中国）において民族・国家を超越した協同体を建設すべしと主張された。それは、近衛文麿首相の政策研究団体・昭和研究会（国史大辞典編集委員会。一九八六、一九九）により提唱され、近衛の政策理念となった。

②マルクス主義者や自由主義者の多くも、この生-権力の掌中にあった。「一九三〇年代末、かつてリベラルな、あるいはマルクス主義的な論陣を張っていた一群の知識人は、『東亜協同体論』を主張して、東アジアにおける諸民族の平等と協同の実現を欧米植民地支配に代わるべき日本の世界史的任務とした」（岡田二〇〇九、一四七-一四八）。

③前掲の政府声明には、「帝國カ支那ニ望む所ハ、コノ東亞新秩序建設ノ任務ヲ分担センコトニ在リ。帝國ハ支那國民カ能ク我カ真意ヲ理解シ、、以テ帝國ノ協力ニ応ヘムコトヲ期待ス」（歴史学研究会編、一九九七、八三）とある。中国は日本の真意を理解し、任務を分担し、協力せよという。それは実質、日本への服属を意味した。この思想が、後の「大東亜共栄圏」論に継承された。

④国際法上、捕虜には正規兵、非戦闘員（戦闘以外の軍務を行う人）、民兵が含まれる（筒井一九九八、二九〇）。非戦闘員に住民を含める場合もある。

⑤日本軍の侵攻と占領によるアジアの犠牲者数は、今も定かでない。一七六四万人という説がある（東京新聞二〇〇五・八・七）。二〇〇〇万人に及ぶという説もある（石上二〇〇七、一一）。

⑥中国人に対する日本軍の残虐行為は、戦後、「三光政策」の問題としても議論された（中国帰還者連絡会議編、一九五七）。三光とは、殺光（殺し尽す）・焼光（焼き尽す）・搶光（奪い尽す）を意味する。

⑦「手記収集の作業を進めている間に、何点かの手記については偶然その原本に接することがあったので、念のため刊本と比較してみたところ、ほとんどの刊本に誤りが発見された。その多くは誤写・誤植による些細な誤りであったが、なかには解釈を歪める看過できぬ誤写もあり、まれには無理な摘録をあえてして原文の意味を損ねているものさえ発見された」（森岡二〇一一、五）。

⑧「兵士たちの苦戦談にかなり共通するのは、①全滅寸前に援軍が来て助かったということ、②八露軍のゲリラ戦・狙撃への恐怖であり、そして、断片的に語られるのが、③徴発という名の略奪、④悲惨な戦場の光景である」（山田二〇〇六、四三）。ここで、全滅寸前に助かったというのは、日本軍の占領地警備の範囲が広大すぎたため、少人数での分散配置になり、そのため、しばしば中国軍やゲリラに包囲され、危機に陥った状況をいう（山田、同書同頁）。

⑨「そうした社会的通念をもった人々が、切迫した生命の危機を感じながら、残虐行為を繰り返すことで心に深い傷を負い、復員後、彼らはひたすら悪夢のような中国戦線の日々を忘れようとした」（山田二〇〇六、五六）。

⑩靖国神社編集の書（靖国神社一九九四）には、戦争の大義を信じて逝った学徒兵の手記が多く収められている。

⑪『戦陣訓』は、一九四一年に東條英樹陸軍大臣が軍紀の引き締めを図って陸軍将兵に下達した訓話をいう（山田一九九七 b、二八六）。

⑫捕虜を「武装解除して日本軍に抵抗しないことを誓約させた上で、解放・帰郷させるという方法をとった部隊もあった」（山田二〇〇六、五二）。それは、処刑も解放も、捕虜を抱えることの負担を回避する方途であった。

⑬イデオロギーは、「意味喪失の渦に巻き込まれた行為者たちに、少なくとも彼らにとって、　意味の幻覚を維持させうる」（Wieviorika,2004, 219）言説として機能する。

⑭戦地の兵士の性行動の報告はあるが、性意識（衝動）の研究は、まだないようである。それは、兵士の精神構造（獣性）の解明にとって重要な課題である。

⑮星野芳郎は、学徒兵の手記には「敵への憎しみを書いた言葉が一言半句もない」とし、「憎むべき敵がいないままに戦場に死なねばならぬ」ことに彼らの不孝の根源があったとした（星野一九六六、四六-四七）。ただし、この指摘の一般化はできない。

⑯前掲『戦陣訓』には、軍人精神ハ「皇國ノ使命ヲ体シ、堅ク皇軍ノ道義ヲ持シ、皇國　ノ威徳ヲ四海ニ宣揚セムコトヲ期セザルベカラズ」とある（日置編、二〇〇五、五〇）。

[文献]

赤澤史朗二〇〇〇「『農民兵士論争』再論」立命館大学法学会『立命館法學』二七一-二二、六二一-六四七

青木秀男二〇〇八「殉国と投企　特攻隊員の必死の構造」社会理論・動態研究所『理論と動態』一、七二-九〇
安藤彦太郎一九七一『日本人の中国観』勁草書房
大本営政府連絡会議一九四二「帝國指導下ニ新秩序ヲ建設スベキ大東亜ノ地域」防衛庁防衛研究所一九八五『史料集　南方の軍政』朝雲新聞社 四〇-四一
Duus, Peter. 1998.「想像の帝国－東アジアにおける日本」（浜口裕子訳）in *The Illusion of Empire: Ideology and Practice in the Greater East Asia Co-Prosperity Sphere*. edited by Duus, Peter & Hideo Kobayashi（『帝国という幻想－「大東亜共栄圏」の思想と現実』ピーター・ドウス・小林英夫編著　青木書店）13-40.
外務省二〇一〇『日本外交文書　太平洋戦争』第一冊「大東亞戰争の呼稱ニ關スル情報局發表（昭和十八年十二月十二日）」
外務省外交史料館 日本外交史辞典編纂委員会編一九九二『日本外交史辞典』山川出版社
Grossman, Dave,1995, *On Killing*: *The Psychological Cost of Learning to Kill in War and Society* New York: Back Bay Books（＝一九八八、 安原和見訳『戦争における「人殺し」の心理学』原書房）
辺見じゅん一九九五『「昭和の遺書」①　父へ、母へ　最後の手紙』角川文庫
―――二〇〇二『昭和の遺書　南の戦場から』文藝春秋社
―――二〇〇三『戦場から届いた遺書』文藝春秋社
日置英剛編二〇〇五『年表 太平洋戦争全史』国書刊行会
星野芳郎一九六六「思考切断の悲劇」朝日新聞社『朝日ジャーナル』八(一)、四三-四七
伊香俊哉二〇〇七「中国雲南省にみる日本軍の住民虐殺（一九四二年～一九四五年）」田中利幸編『戦争犯罪の構造　日本軍はなぜ民間人を殺したのか』大月書店、一四三-一七四
石上正夫二〇〇七「歴史観の強要ほど恐ろしいものはない」日本戦没学生記念会『わだつみのこえ』一二六、 四-一三
伊藤桂一一九六九『兵隊たちの陸軍史　兵営と戦場生活』番町書房
猪熊得郎二〇〇八「少年兵の無念　生きているうちに語り継ぎたい」日本戦没学生記念会『わだつみのこえ』一二八、 三四-五二
岩手・和我のペン一九八四『農民兵士の声がきこえる　七〇〇〇通の軍事郵便から』日本放送出版協会
岩手県農村文化懇談会一九六一『戦没農民兵士の手紙』岩波書店
笠原十九司二〇〇七「南京大虐殺事件　南京市民に対する軍暴力を中心に」田中利幸『戦争犯罪の構造　日本軍はなぜ民間人を殺したのか』大月書店、 一〇九-一四二
鹿野政直二〇〇五、『兵士であること　動員と従軍の精神史』朝日新聞社、
Keen, Sam, 1986, *Faces of the Enemy; Reflections of Hostile Imagination,* San Francisco: Harper & Row（＝一九九四、 佐藤卓己・佐藤八寿子訳『敵の顔　憎悪と戦争の心理学』柏書房）
菊池敬一一九八三『七〇〇〇通の軍事郵便　高橋峯次郎と農民兵士たち』柏樹社

国史大辞典編集委員会編一九八六『國史大辭典』吉川弘文館
子安宣邦二〇〇三『「アジア」はどう語られてきたか　近代日本のオリエンタリズム』藤原書店
真継不二夫一九九四『海軍特別攻撃隊の遺書　二〇六〇余名の特攻隊員の人間記録』ＫＫベストセラーズ
松井芳郎・薬師寺公夫二〇〇五『国際人権条約・宣言集』東信堂
三井爲友一九四七「『戦歿學生の手記』に寄せて」東大戦没學生手記編集委員會、『はるかなる山河に　東大剪没学生の手記』東大協同組合出版部、 二三一-二四三
森岡清美一九九五『決死の世代と遺書　太平洋戦争末期の若者の生と死』（補訂版）吉川弘文館
―――二〇一一『若き特攻隊員と太平洋戦争　その手記と群像』吉川弘文館
日本戦没学生記念会一九九五『新版　きけ　わだつみのこえ　日本戦没学生の手記』岩波書店
―――二〇〇三『新版　第二集　きけ　わだつみのこえ　日本戦没学生の手記』岩波書店
野田正彰二〇〇七「偽りの近代からくる不安を克服するために　日本軍人と今日の日本人」田中利幸　『戦争犯罪の構造　日本軍はなぜ民間人を殺したのか』大月書店、 二六七-二八二
岡田裕之二〇〇九『日本戦没学生の思想　〈わだつみのこえ〉を聴く』法政大学出版局
小熊英二一九九八『〈日本人〉の境界　沖縄・アイヌ・台湾・朝鮮　植民地支配から復帰運動まで』新曜社
小野広一九六九「偶像化した『わだつみの像』」『世界』岩波書店、 二二三-二二五
小野賢二・藤原彰・本多勝一一九九六『南京大虐殺を記録した皇軍兵士たち　第十三師団山田支隊兵士の陣中日記』大月書店
歴史学研究会編一九九七『日本史史料　[五]現代』岩波書店
陸軍省報道部一九四二『大東亜戦争』
佐藤成基二〇〇二「ナショナリズムとファシズム　歴史社会学的考察」社会学研究会『ソシオロジ』四六（三）、 三七-五三
下中弘編一九九三 a『日本史大事典』四、 平凡社
―――一九九三 b『日本史大事典』五、 平凡社
庄司潤一郎二〇〇五「新秩序の模索と国際正義・アジア主義　近衛文麿を中心として」石津朋之・ウィリアムソン・マーレー編著『日米戦略思想史　日米関係の新しい視点』彩流社、三九-五三
相賀徹夫編一九八七「日中戦争」『日本大百科全書』一七、 小学館、 七八七-七九一
高田里恵子二〇〇八『学歴・階級・軍隊　高学歴兵士たちの憂鬱な日常』中央公論新社
武田信行二〇〇九『ジュンちゃんへ　戦争に行った兄さんより　少年航空兵・松本勝正からの手紙』風媒社
竹内好二〇〇六『アジアへの／からのまなざし』日本経済評論社
田中利幸二〇〇七『戦争犯罪の構造　日本軍はなぜ民間人を殺したのか』大月書店
中国帰還者連絡会議編一九五七『三光　日本人の中国における戦争犯罪の告白』光文社
東京新聞二〇〇五・八・七、「アジア太平洋戦争における各国戦争犠牲者数及び地域別日本人戦没者数」

東大戰没學生手記編集委員會一九四七『はるかなる山河に　東大剪没学生の手記』東大協同組合出版部
筒井若水編集代表一九九八『国際法辞典』有斐閣
内海愛子二〇〇五『日本軍の捕虜政策』青木書店
靖国神社一九九四『いざさらば我はみくにの山桜　「学徒出陣五十周年」特別展の記録』展転社
山田朗一九九七 a『軍備拡張の近代史　日本軍の膨張と崩壊』吉川弘文館
―――一九九七 b『外交資料　近代日本の膨張と侵略』新日本出版社
―――二〇〇六「兵士たちの日中戦争」倉沢愛子他編『戦場の諸相』（アジア・太平洋戦争　五）岩波書店、 三三-五八
―――二〇〇七「占領地民衆に対する大本営の認識　大本営軍部の命令にあらわれる『民』」田中利幸『戦争犯罪の構造　日本軍はなぜ民間人を殺したのか』大月書店、 二三九-二六六
山本武二〇〇一『一兵士の従軍記録　つづりおくわたしの鯖江三十六聯隊』しんふくい出版
安川寿之輔一九九七『日本の近代化と戦争責任　わだつみ学徒兵と大学の戦争責任を問う』明石書店
吉田貞治一九八七『とうちゃんの軍事郵便』そしえて
わだつみ会一九九三『学徒出陣』岩波書店
Wieviorika, Michel, 2004, *La Violence*、 Paris: Bureau des Copyrights Français（＝二〇〇七、田村光照訳『暴力』新評論）